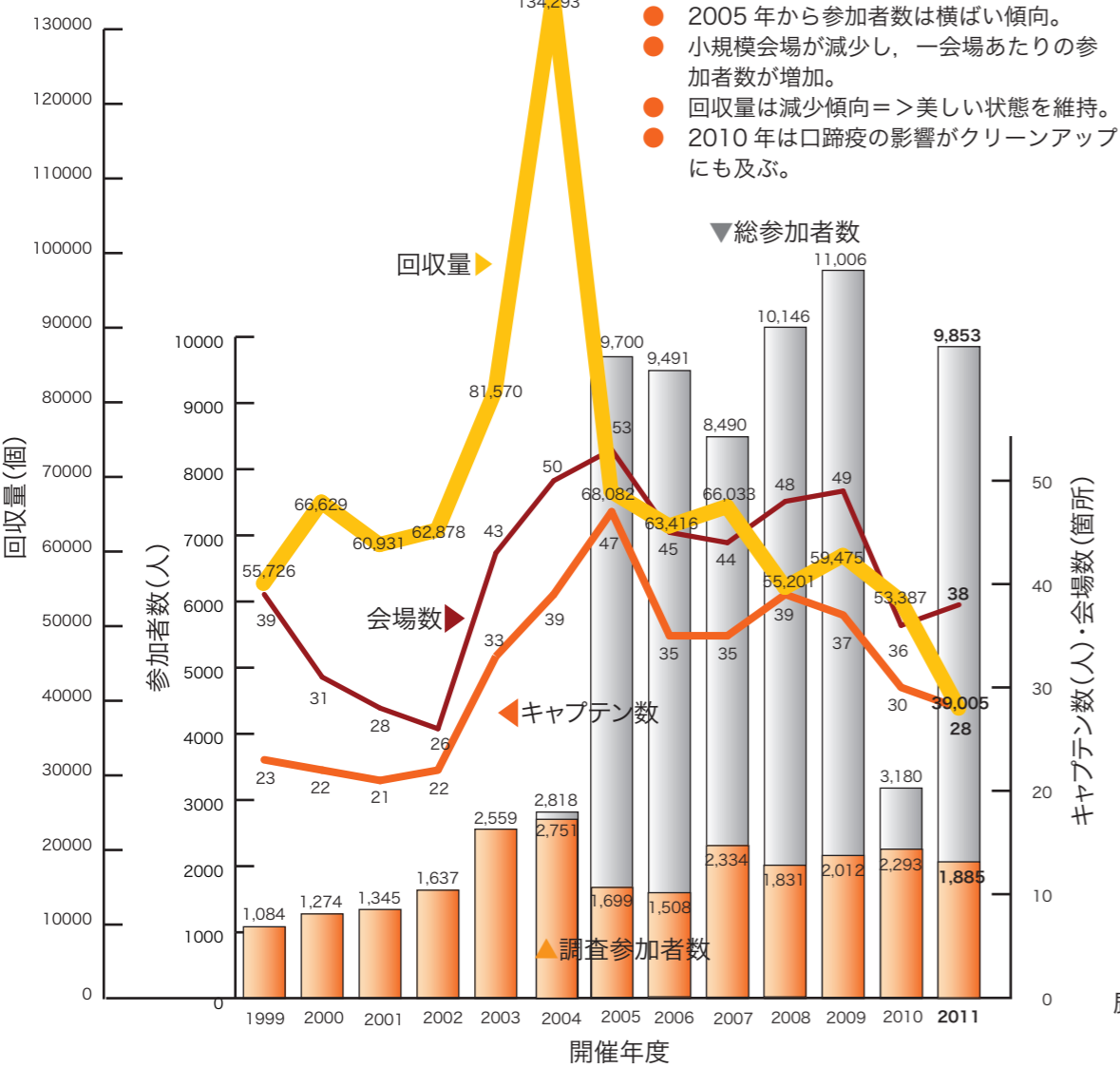


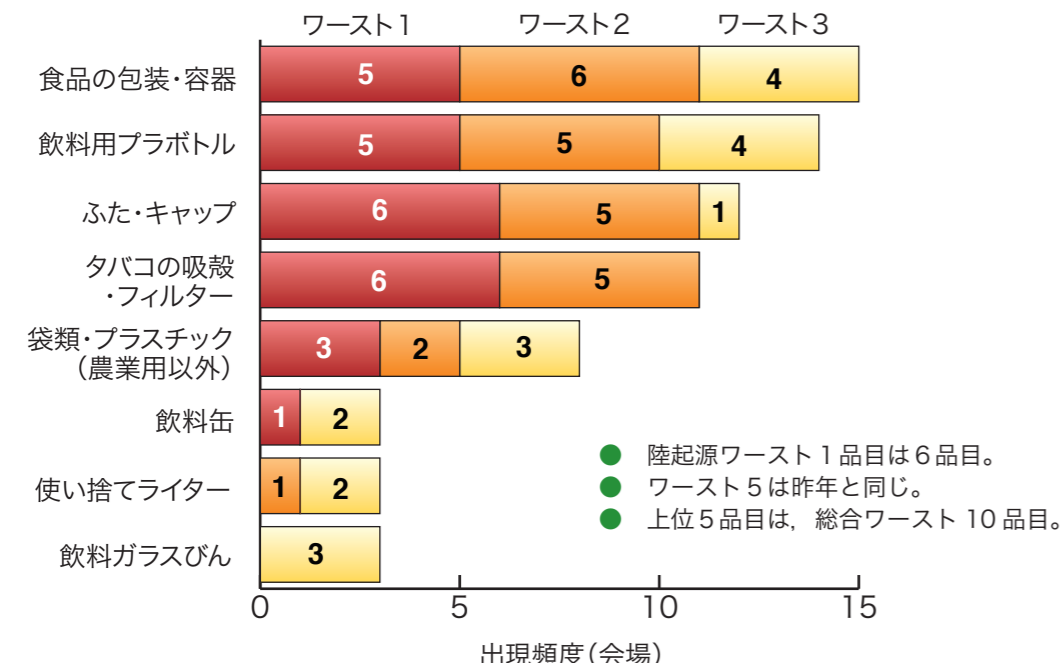
Kagoshima Cleanup Campaign 2011

2011年のかごしまクリーンアップキャンペーンには、9,853人が参加し、県内の40.7kmの海岸および内陸から一つひとつ丁寧に拾い上げられたごみの総数は、39,005個、53,612袋、26.3トンにも達しました。ここでは、2011年のかごしまクリーンアップキャンペーンの総合結果（海岸、内陸）の概要を紹介します。

▼ かごしまクリーンアップキャンペーン 13年間の推移

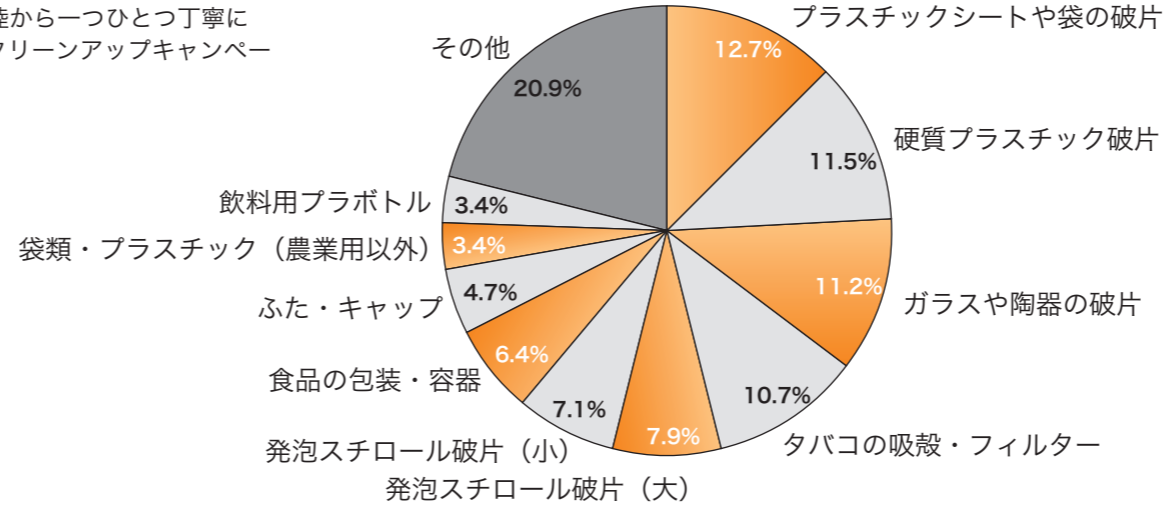


- 2005年から参加者数は横ばい傾向。
- 小規模会場が減少し、一会場あたりの参加者数が増加。
- 回収量は減少傾向=>美しい状態を維持。
- 2010年は口蹄疫の影響がクリーンアップにも及ぶ。



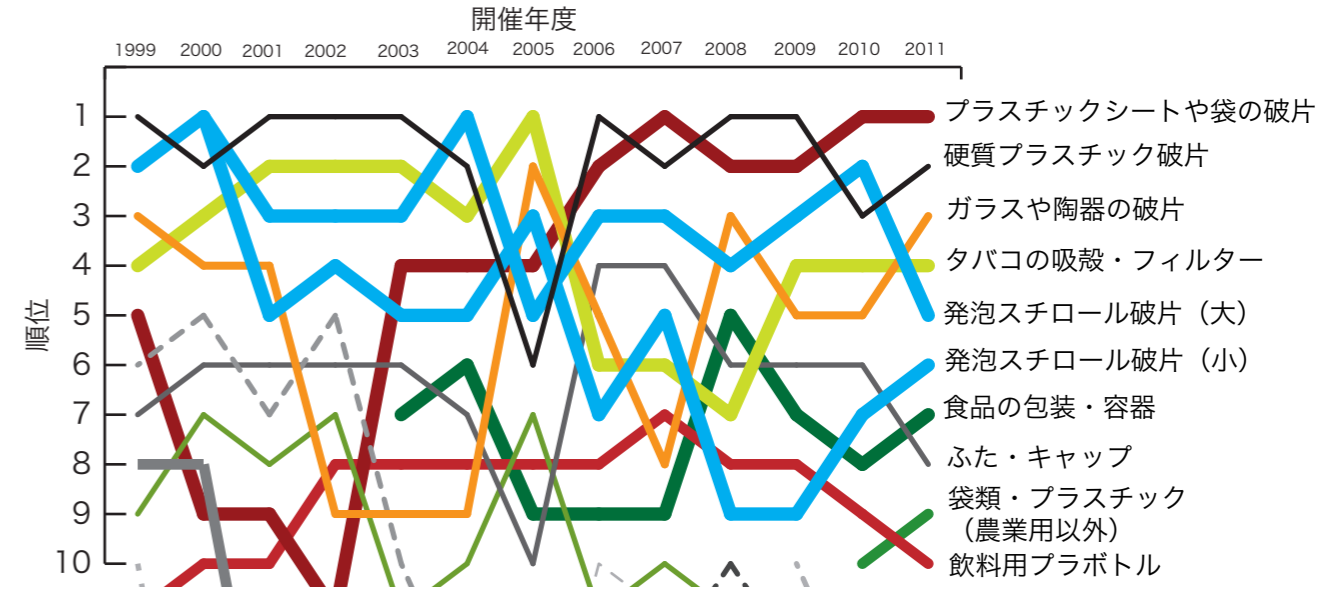
- 陸起源ワースト1品目は6品目。
- ワースト5は昨年と同じ。
- 上位5品目は、総合ワースト10品目。

▲ 陸起源類ワースト3品目の会場頻度(会場数26)

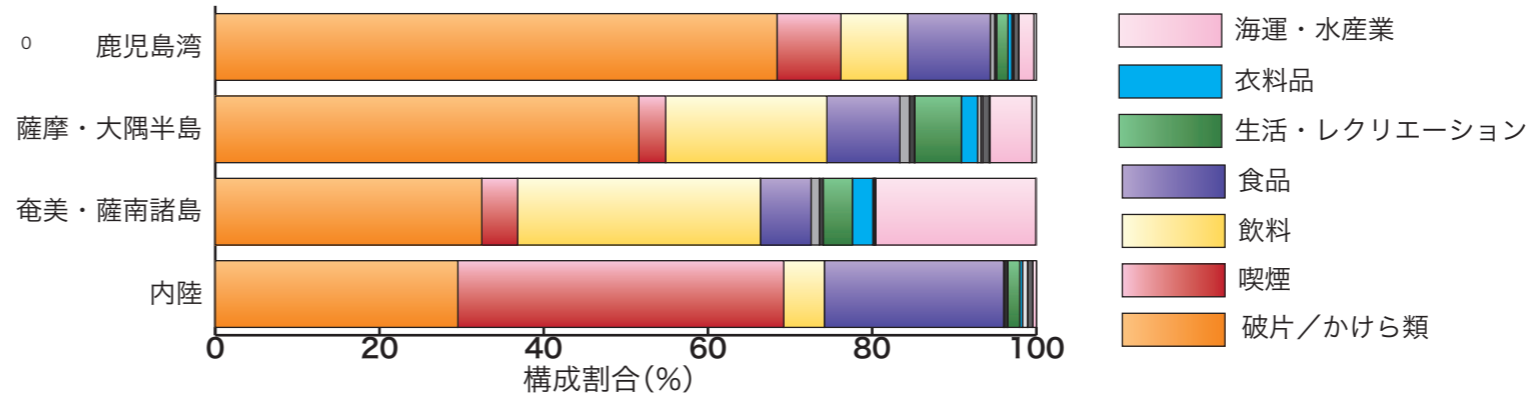


▲ 総合ワースト10の構成割合

- 13年間でワースト3最多は、硬質プラスチック破片(12回)、続いて発泡スチロール破片(大)(10回)。
- プラスチックシートや袋の破片は2006年から連続ワースト3。
- 2000-2005年ワースト3であったタバコの吸殻・フィルターは、2006年から4位以下へ。
- 発泡スチロール破片(大、小)は順位降下傾向。
- 2003年から2011年までの9年間、特定9品目(プラスチックシートや袋の破片、硬質プラスチック破片、ガラスや陶器の破片、タバコの吸殻・フィルター、発泡スチロール破片(大、小)、食品の包装・容器、ふた・キャップ、飲料用プラボトル)が毎年ワースト10。
- 鹿児島県の特徴：全国と比べ、ガラスや陶器の破片の順位が高い。



▲ 総合ワースト10の13年間の推移



▲ 流出起源割合の海域比較

まとめ

陸から海に流れ出したごみは、海の流れによって外洋に流出し、他の地域や国に影響を与えます。また一度海底に沈むと、回収が困難となります。産業や医療に関わるごみの流出も大きな問題ですが、「飲料・食品」「喫煙」「生活・レクリエーション」など日常生活に起因するごみが海のごみの主体となっています。よって私たちはまず、海と離れた陸上で生活する私たちの生活が、海に大きな負担をかけていることに気付かなければなりません。また近年、海のごみの主体であるプラスチックの破片化が深刻な問題となっています。これは海岸に漂着したごみが紫外線によって劣化したり、波浪などの衝撃によって破片化したものであり、特にプラスチックは、微小な破片となっても自然界では長期間分解されません。

本結果から見えてくる効果的な対策は、全体の8割を占めるワースト10への集中的な対策です。そのためには、まず全体の5割以上を占める破片/かけら類の発生の抑制が重要なカギとなり、そのためには破片化する前に海岸からごみを回収することが必要です。また海岸は、一波ごとに海のごみを集め海のフィルターとしての役割を持ち、海のごみは海岸で最も密度が高くなります。よってこのフィルターの機能を常に正常に働かせるためにも定期的なクリーンアップは欠かせません。陸域でのごみの発生抑制は、海ごみ減量のためには大切な取り組みではありますが、残念ながら発生をゼロにすることはできません。よって私たちは、海に流出し続けるごみとこれまでに流出したごみによる破片化を防ぎ、美しい海を取り戻すためにも、今まで以上に積極的に継続かつ効率的にクリーンアップに取り組まなければなりません。

- 「破片/かけら類」は、7品目中5品目がワースト10。全体の54.4%。
- 「陸起源類」は、45品目中5品目がワースト10。全体の41.5%。
- ワースト10に占める「陸起源類」の割合は、全体の28.9%。ワースト20は35.2%。
- 「海・河川・湖沼起源類」は、全体の4.1%。ワースト10なし。
- 「陸起源類」および「海・河川・湖沼起源類」(以下製品類)のワースト10は、総合16位以内。製品類全体の78.8%。全体の35.9%。

※ 総合結果とは、2011年1月から12月までに実施された海岸、内陸会場のうち、データを収集した26会場の総計を示す。